

岡山畜産便り

2023 10



吉備中央町 雲岡牧場ご家族(酪農)

も く じ

〔自給飼料施策〕

県が取り組む『耕畜連携』の紹介
岡山県農林水産部畜産課 1

〔特集〕

飼料価格等高騰に伴う岡山県内畜産の収益動向
＜肉用牛繁殖経営編＞
一般社団法人岡山県畜産協会
経営支援部 築山 伴文 3

〔トピック〕

和子牛生産者臨時経営支援事業の
ブロック割り見直しを！！
一般社団法人岡山県畜産協会 10

〔技術のページ〕

サシバエ防除で牛のストレス低減！！
農林水産総合センター畜産研究所 11

〔家保のページ〕

管内育成牧場のフォローアップ
高梁家畜保健衛生所 13

〔家畜衛生〕

補助事業を活用して、牛伝染性リンパ腫の対策を！
一般社団法人岡山県畜産協会
家畜衛生部 15

〔共済フレッシュさん〕

獣医師として二年目を迎えて
美作家畜診療所 伊藤 友 17

〔畜産現場の声〕

酪農家は共働き家庭の理想の形
吉備中央町 雲岡 阿耶 18

〔担い手〕

中国四国酪農大学校における酪農担い手
育成の取り組み
公益財団法人中国四国酪農大学校
関 哲生 19

FOSS

乳・乳製品・飼料分析ソリューション

**【BacSomatic™】**

乳中の体細胞数・細菌数を同時に短時間で測定可能！

乳房炎、衛生状況のモニタリングや原料乳受け入れ現場でのスクリーニング検査の効率化を実現できます。

測定項目：細菌数(IBC、CFU)、体細胞数

測定対象：生乳

**【MilkoScan™ Mars】 FT-IR乳成分分析装置**

生乳成分を1分で測定する、コンパクトモデル！

生乳の品質管理、原料乳の標準化、製造管理の効率化を高い次元で支援します。

測定項目：脂肪、タンパク、乳糖、全固形、無脂固形、氷点(加水)

測定対象：生乳、製品乳

**【NIRS™ DS2500F】 NIR分析装置**

飼料、飼料原料の複数成分を1分で同時分析！

TMRセンターでの飼料設計、飼料品質の最適化を支援します。

測定項目：脂肪、タンパク、水分、灰分、スターチ、粗繊維など

測定対象：飼料、飼料原料、配合飼料

ANALYTICS BEYOND MEASURE

フォス・ジャパン株式会社

セールス・サービス拠点：札幌・大阪・福岡

TEL: 03-5962-4811 / Mail: info@foss.co.jp

ホンモノは、おいしい。

OHAYO

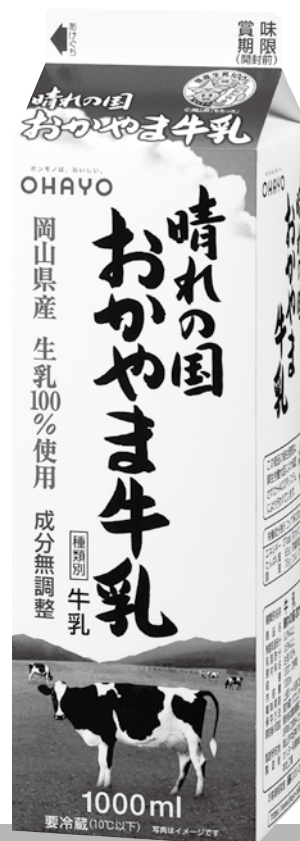
岡山県産 生乳100%使用

晴れの国
おかやま牛乳



©岡山県「ももっち」

岡山県産の牛乳を100%使用した牛乳です。
岡山県下、各地域から集乳した生乳を
使用しました。



www.ohayo-milk.co.jp

オハヨー乳業株式会社

〔自給飼料施策〕

県が取り組む『耕畜連携』の紹介

岡山県農林水産部畜産課

1 はじめに

輸入飼料の現状については、皆様ご承知のとおり、飼料原料の国際価格やウクライナ情勢、円安等の影響により高止まりしている状況であり、畜産経営における生産コスト上昇への対策は喫緊の課題となっています。

本県では、令和4年度から飼料価格高騰に対する緊急的な対策として、「飼料価格高騰緊急対策事業」、「酪農経営緊急対策事業」による支援を実施しているところですが、これまで、本誌に掲載したとおり、輸入飼料依存からの脱却を目指した施策等の実施が必要です。

本誌2022.10月号に掲載した「今だからこそ見直そう！『耕畜連携』」でも記載しておりますが、本県では、耕畜連携の取組強化を輸入飼料依存からの脱却の一つの手段と捉え、耕畜連携体制の構築や課題の解決に向け、施策を展開しています。

今回の内容は、取組の状況や今後の展望、関連する補助事業などについて紹介します。

2 県産飼料の生産状況について

水田における県産飼料の生産状況について表1に示します。飼料価格が高騰した影響から、県産飼料の作付面積は年々増加傾向にあります。

表1 水田における県産飼料の作付状況 (ha)

	R2	R3	R4	R5 (作付意向)
飼料用米	1,073	1,730	2,002	→
WCS用稲	334	346	415	↗
飼料作物	1,275	1,294	1,350	→

※出典（飼料用米、WCS用稲）：農林水産省（水田における作付状況）、令和5年産第3回中間的取組状況作付意向
（飼料作物）：県調べ、基幹作及び二毛作面積の合計

3 県による耕畜連携の取組状況及び計画

(1) 県による需要量調査

県では、昨年度に引き続き、畜産農家における県産飼料の需要量の調査を行いました。調査結果について表2に示します。昨年度と比較すると、畜産農家の県産飼料に対する意識が高まっていることがうかがえます。この調査結果を基に、地域農業再生協議会や関係機関へ情報提供を行うとともに、マッチング支援の手法等を庁内の関係部局と検討を進めています。

引き続き、県産飼料の供給を希望される場合は、管轄の県民局までお知らせください。

表2 需要量調査の結果（増加分）（単位：ha・戸）

区分	稲WCS		とうもろこし		稲わら		牧草		合計
	面積	戸数	面積	戸数	面積	戸数	面積	戸数	
令和5年産	12.6	7	4.5	3	47.7	2	4.9	3	69.7
令和6年産	47.0	24	9.0	8	87.9	17	21.4	16	165.3

(2) マッチング事例の共有化

耕種・畜産農家間でのマッチングを支

援する方法について、県や市町村、関係機関の担当者で考え方が異なる場合があります。マッチングを行うためには一定の対応スキームが必要であると考え、これまでマッチングを図ってきた実績の事例調査等を行い、成功している理由を明らかにし、当該事例を関係機関へ紹介して情報の共有を図りたいと考えています。このことにより、農業者からの問い合わせに対して、対応方法の認識が統一され、これまで以上に農家間のマッチングが図られると考えています。

4 稲わらの利用推進（単県事業紹介）

県産稲わらは表2に示したとおり、約88ha分の新たな需要量が確認されました。稲わらの収集は飼料への有効利用のみならず、野焼きによる大気汚染の防止にも繋がる取組でもあります。飼料自給率の向上と環境負荷軽減の両面から稲わらの畜産利用を推進するため、令和5年度から岡山県産業廃棄物処理税の活用により、「県産稲わら利活用推進事業」を創設しました。本事業では、事業主体自らが「稲わら収集・供給計画」を作成し、事業実施年度の翌々年度までに3～5haの稲わら収集面積の拡大を要件とすることで、積極的な取組を支援することとしています。供給先には畜産農家を位置づけ、本県の飼料自給率向上に資する事業と考えています。

地域の水稲作付農家等と連携を図り、稲わら収集・利用に取り組まれる場合には、本事業の活用を御検討いただければと思います。

【事業概要】

事業主体：農協、営農組合、生産者団体等
事業内容：県産稲わらの収集面積の拡大に必要な施設の整備及び生産性向上に係る機械等の導入

補助率：1/2以内

補助要件：①稲わら収集面積の拡大

新規：3ha以上、拡大：5ha以上

②稲わら収集に関する情報発信

5 県産飼料利用拡大研修会を計画中

水田等を活用した県産飼料の生産・利用を促進し、耕畜連携の取組を推進しているなかで、実際に県産飼料を活用している畜産農家から、給与方法や連携体制等を紹介いただくとともに、現地視察を行い、保管の実態や利用に係る機械等を見ていただく研修会の開催を計画しています。

利用経験のない方や現在利用している方においても、どのように給与するのかや、300kg近いサイレージの運搬など情報交換の機会となり、県産飼料の理解醸成の場となると考えています。

6 おわりに

今回、県による取組状況や県事業、研修会等について紹介しましたが、飼料価格高騰、高止まりに対応するために、中長期的な視点から耕畜連携の取組を推進しております。農家間のマッチング支援や関係機関との連携を強化し、持続的な畜産経営に向けて取り組んでまいりますので、各種調査等への御協力をお願いします。



〔特集〕

飼料価格等高騰に伴う岡山県内畜産の 収益動向＜肉用牛繁殖経営編＞

一般社団法人岡山県畜産協会 経営支援部 築山 伴文

はじめに

肉用牛繁殖経営は、令和2年10月以降における飼料価格の高騰、その後の高止まりに加え、資材費や動力光熱費等の上昇により子牛生産費が増加し、一方、収益に及ぼす影響が最も大きい和子牛価格は、開催月で変動はあるものの令和4年3月期以降下落し、直近令和5年10月期では450千円を下回る極めて厳しい経営状況となっています。

そこで、昨年度から当協会では、比較的早い時期に経営データを収集・比較して、肉用牛繁殖経営がどのような収益状況にあるのかを分析し、情報提供しているところであり、本内容も5月のJA和牛部会総会、6月の当協会事業説明会及び9月の岡山和牛子牛資質向上対策協議会総会で紹介したところですが、一部最新のデータに更新し、改めて整理しましたので報告します。このことが畜産経営の維持に繋がり、今後の施策や支援方針の一助となれば幸いです。

1. 経営環境

(1) 牛肉需給動向

消費量は、近年の和牛肉ブームの高まり等を背景に堅調に推移し、令和元年度には、米国でのBSE発生前の平成14年度を超えるまでに増加しました。しかしながら、令和2年度以降、新型コロナウイルス感染症の影響による輸入量の減少等により、3年連続で減少しています。また、和牛の卸売価格は、平成28年以降、生産量の増加等を背景に軟調ながら高値で推移していたものの、令和2年2月以降は、同感染症の影響によるインバウンド需要や外食需要が大きく減少し、急激に低下しました。5月以降、経済活動の

再開や輸出の回復に伴い上昇し、11月以降は、前年を上回る又は前年並みで推移しましたが、令和4年1月以降は、同感染症の感染拡大が収束を見ないなか、物価の上昇による消費活動の低迷の影響もあり、前年を下回って推移しており、その傾向は令和5年も続いています。

(2) 子牛市況（全国）

和子牛価格は、リーマン・ショックの影響や口蹄疫の発生により、30万円台まで低下していたものの、生産頭数の減少や枝肉価格の上昇により、平成28年度第4四半期には、過去最高の851千円になりました。その後も高値で推移していましたが、令和2年2月以降、上記需給動向に連動し、子牛価格は大きく低下しました。枝肉価格の回復に伴い、令和3年度第4四半期には、730千円まで回復したものの、令和4年5月に急落し、その後も低下傾向で推移しています。

なお、本県の家畜市場における和子牛価格の推移は、図1のとおりです。

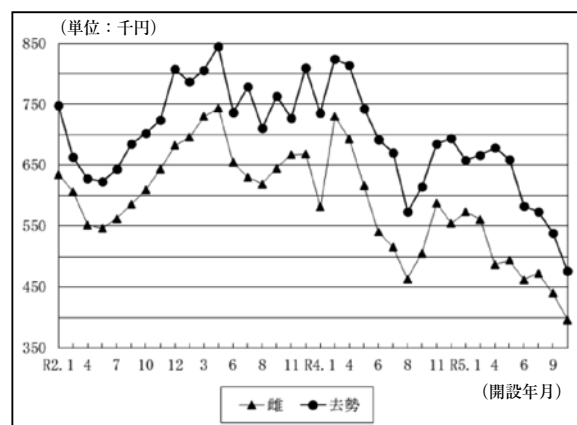


図1 全農総合家畜市場和子牛平均価格推移

(3) 費用要因及び雑収入

この内容は共通するため、同誌8月号＜酪農経営編＞を参照願います。

2. 肉用牛繁殖経営の収益動向

(1) 分析対象経営の概要

令和5年4月から5月において16戸のデータを収集しましたが、酪農経営編と同様に、令和2年、3年及び4年の決算データ（1月から12月）がすべて存在する10戸の経営について、分析可能な項目を比較しました。戸数が少ないものの、比較的地域は分散しており、同一経営での比較であるため、傾向は見て取れると考えています。

なお、より速い情報提供のため、青色申告決算書を利用しており、経営毎に育成牛の評価基準や費目への配分が異なる点等については、補正できていません。

①成雌牛飼養頭数

成雌牛の平均飼養頭数は、令和2年の22.6頭から徐々に増加し、令和4年は24.9頭で、県平均（15.3頭/R4酪肉近値）より多頭飼育の経営が対象となっています。

平均頭数が毎年増加したのは、新規参入や経営継承により規模拡大途中の経営が含まれているためですが、同じ階層内での増加のため、令和4年に20頭台から10頭台に減少した経営を除き、令和2年から4年における9戸の分布は、すべて同一経営となっています。

なお、10頭以上20頭未満の層が一番多く、全体の50%で、次いで20頭以上30頭未満の層が多く、この2階層で全体の70%を占めています。

表1 成雌牛飼養頭数の分布

(単位：戸)				
区 分	R2	R3	R4	備 考
50頭以上	1	1	1	県平均：15.3頭
40頭以上50頭未満	1	1	1	地域（JA）別
30頭以上40頭未満	0	0	0	びほく・新見：3
20頭以上30頭未満	3	3	2	真庭：4
10頭以上20頭未満	4	4	5	津山・勝英：2
10頭未満	1	1	1	その他：1
合 計	10	10	10	毎年同一
平均飼養頭数	22.6	23.8	24.9	頭

②成雌牛1頭当たり子牛販売頭数

表2に分布を示していますが、経営間のばらつきが大きいと言えます。また、この3年間に於いて、経営内に増減があるものの、平均では、令和2年と3年は0.81頭で、ほぼ同数でした。ただ、令和4年は、酪農経営との連携による受精卵移植の活用や前年からの繁殖成績が優良であったことにより1.0頭以上が2戸あった一方、20頭台の経営で、繁殖成績の悪化により0.8から0.6頭台に減少した事例もあり、平均は0.78頭に減少しています。

表2 成雌牛1頭当たり販売頭数の分布

(単位：戸)				
区 分	R2	R3	R4	備 考
1.0頭以上	0	0	2	ET活用等
0.9頭以上1.0頭未満	2	2	1	
0.8頭以上0.9頭未満	3	4	2	
0.7頭以上0.8頭未満	3	2	3	
0.6頭以上0.7頭未満	1	1	1	
0.5頭以上0.6頭未満	0	0	0	
0.5頭未満	1	1	1	規模拡大(自家保留)
平均販売頭数	0.805	0.808	0.781	頭
1経営当たり平均販売頭数	18.2	19.2	19.4	頭

成雌牛1頭当たり子牛販売頭数は、分娩間隔や事故率などと関連し、繁殖経営として重要な指標です。数値が低い場合は、特に注意をすべきと考えます。

なお、0.5頭未満となっている経営については、小規模経営で自家保留による規模拡大が要因であったため、あえて備考に記載しています。

③分娩間隔

本分析が青色申告決算書によるものであり、各年の分娩間隔を把握することが困難なため、令和4年末に在籍している成雌牛の通算分娩間隔の平均値を、各経営の参考値として整理しています。繁殖経営においては、1年1産が目標とされていますが、全体の50%は400日以上に位置し、平均では398日（13.1ヵ月）となっています。

表3 分娩間隔の分布

(単位：戸)

区 分	通算	備 考
430日以上440日未満	2	
420日以上430日未満	1	
410日以上420日未満	1	
400日以上410日未満	1	
390日以上400日未満	2	
380日以上390日未満	2	
370日以上380日未満	0	
360日以上370日未満	0	
350日以上360日未満	1	
平均分娩間隔	398.0 日(13.1ヵ月)、県：414.2日(13.6ヵ月)	

④子牛1頭当たり販売価格

表4のとおり対象経営の平均は、令和2年が662千円で、3年が769千円、4年が673千円と推移しており、新型コロナウイルス感染症の影響等による市場全体の価格変動に大きく連動した結果となっています。ただ、対象経営は市場平均よりも高い価格で販売しており、令和4年は対市場比102.9%となっています。

分布を見ますと、こちらも相場による影響が大きく、令和2年は750千円未満の5階層に集中していましたが、令和3年は850千円以上が1戸あるなど、600千円以上にすべての経営が分布し、高価格帯に移っていることが分かります。

ただ、令和4年は、市場平均が令和2年とほぼ同額（対象経営平均は11千円高）であるにもかかわらず、850千円未満の7階層に分散しており、経営間の差が極めて大きくなっています。これは、子牛市場における価格の二極化（優良牛が今までどおり評価される高価格帯とそれ以外の牛が低価格帯に分かれる状況）が影響していると考えます。ちなみに、令和4年の最大値と最小値の差は427千円で、令和2年の219千円、令和3年の241千円を大きく上回っています。

なお、成雌牛1頭当たり平均販売価格は、前段②で示した成雌牛1頭当たり子牛販売頭数の減少により、令和2年に比較して令和4年は8千円低下しています。

表4 子牛1頭当たり販売価格の分布

(単位：戸)

区 分	R2	R3	R4	備 考
850千円以上	0	1	0	
800千円以上850千円未満	0	2	1	
750千円以上800千円未満	0	2	1	
700千円以上750千円未満	3	4	1	
650千円以上700千円未満	1	0	3	
600千円以上650千円未満	3	1	2	
550千円以上600千円未満	2	0	1	
550千円未満	1	0	1	
平均販売価格	661.7	768.8	672.7	千円
全農総合家畜市場平均価格	653.4	731.6	653.6	千円
成雌牛1頭当たり平均価格	532.8	621.5	525.2	千円

⑤成雌牛1頭当たり購入飼料費

表5下段のとおり対象経営の平均は、令和2年が206千円でしたが、3年には216千円に、4年では254千円まで上昇しており、対2年比123.5%、48千円の大幅な増加となっています。

このことを象徴するように、令和2年と3年にはなかった400千円以上の2階層にそれぞれ1戸ずつが分布しており、ともに購入飼料に依存していることが大きく影響しています。

ただ、450千円以上の経営は、②で触れた2戸のうちの1戸で、成雌牛1頭当たり1.14頭の出荷を実現しており、本数値を大きくする要因にもなるため、考慮が必要です。

表5 成雌牛1頭当たり購入飼料費の分布

(単位：戸)

区 分	R2	R3	R4	備 考
450千円以上	0	0	1	自給飼料作付なし
400千円以上450千円未満	0	0	1	1頭当たり1.1a
350千円以上400千円未満	1	1	0	
300千円以上350千円未満	0	1	2	
250千円以上300千円未満	2	1	1	
200千円以上250千円未満	1	3	2	
150千円以上200千円未満	5	3	2	
100千円以上150千円未満	1	1	1	コントラ利用、放牧等
平均購入飼料費	205.7	216.0	254.1	千円

⑥成雌牛1頭当たり飼料作付け延べ面積

表6は、令和4年青色申告決算書に記載の作付面積（放牧地は考慮出来ていません）に対して、表・裏の作付け品種を確認して整理したものです。対象経営の平均は、およそ10aで、2a未満が3戸となっています。また、図2は飼料作付け延べ面積と購入飼料費の関係を示して

おり、対象経営においては、作付け延べ面積が大きい方が購入飼料費の低減につながっています。

ただし、投下労働時間や関連経費、収量や品質が重要であることは言うまでもありません。一方、自給飼料の作付けがない場合は、肉用牛売却所得の課税の特例措置（いわゆる肉免）に影響する場合がありますので、注意が必要です。

表6 成雌牛1頭当たり飼料作付け延べ面積の分布

(単位：戸)		
区 分	R4	備 考
18a以上20a未満	1	コントラ利用
16a以上18a未満	1	
14a以上16a未満	0	
12a以上14a未満	1	
10a以上12a未満	1	
8a以上10a未満	2	1戸はコントラ利用(放牧あり)
6a以上8a未満	0	
4a以上6a未満	0	
2a以上4a未満	1	
2a未満	1	
作付なし	2	1戸は放牧あり
平均飼料作付け延べ面積	9.55	a

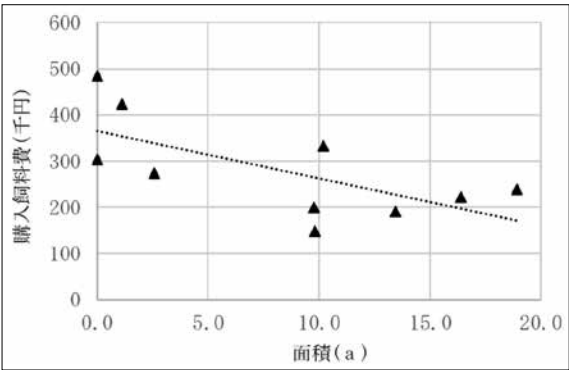


図2 飼料作付け延べ面積と購入飼料費の関係

⑦成雌牛1頭当たり所得金額

表7下段に成雌牛1頭当たり平均所得金額を示しましたが、令和2年が120千円、3年が216千円で、4年はこの3年間で最も低い101千円でした（対2年比84.5%、対3年比47.0%）。令和2年と3年の比較では、10戸中8戸で同所得が向上し、令和3年と4年では、10戸中9戸で同所得が低下していることから、子牛相場の変動が繁殖経営の収益を左右する最大の要因と言わざるを得ないのですが、令和2年と4年では、向上と低下の戸数は5戸ずつとなっています。経費の

増加により同所得が19千円低下したものの、④で触れたように、市場平均価格はほぼ同額であったことから、各経営の飼育技術（二極化に影響）や自給飼料生産の取り組み等の差が明暗を分けたと言えます。

令和4年の分布は、令和3年ほどではないもののばらつきが大きく、令和2年同様、3戸が所得マイナスとなっており、その上層の0円以上50千円未満と合わせた2階層で、全体の50%を占めています。ちなみに、最大値と最小値の差は、令和2年の378千円に対し、令和4年は401千円とやや広がっています。

参考に、集計から除いた6戸のうち、3戸が赤字となっています。

表7 成雌牛1頭当たり所得金額の分布

(単位：戸)				
区 分	R2	R3	R4	備 考
400千円以上	0	1	0	
350千円以上400千円未満	0	1	0	
300千円以上350千円未満	0	1	1	
250千円以上300千円未満	1	1	0	
200千円以上250千円未満	2	0	1	
150千円以上200千円未満	0	2	2	
100千円以上150千円未満	3	0	1	
50千円以上100千円未満	0	1	0	
0円以上50千円未満	1	2	2	
0円未満	3	1	3	
平均所得金額	119.7	215.4	101.2	千円

(2) 飼料価格等の高騰が収益性に及ぼす影響

前段の経営概要を整理し、令和2年から4年の成雌牛1頭当たり収支動向を表8に示しました。

収入を見ますと、令和3年は対2年比119.8%、123千円増加していますが、令和4年は対3年比87.0%、97千円減少し、対2年比では、104.2%、26千円でわずかな増加となっています。これは、成雌牛1頭当たりの子牛販売価格の増減が大きく影響していますが、令和4年と2年の比較においては、飼料価格高騰に伴う補填金や緊急支援補助金を含む雑収入の増加が要因となっています。

一方、経費を見ますと、令和2年以

降増加しており、令和4年は対2年比108.9%、45千円（対3年比103.2%、17千円）となっています。これは、成雌牛1頭当たりの購入飼料費が令和2年比123.5%、48千円、農薬衛生費が125.3%、5千円、諸材料費が154.1%、9千円、動力光熱費が129.4%、6千円それぞれ増加していることが影響しています。

特に、購入飼料費は、経費全体に占める割合が最も大きい項目であり、令和4年は46.4%まで上昇しているため、今後の肉用牛繁殖経営において、飼料費の増加をいかに小さくするかが最重要課題と言えます。

表8 経営概要及び収支動向等

項目	単位	R2	R3	R4	R4/R3	R4/R2
集計対象件数	戸	10	10	10	100%	100%
成雌牛飼養頭数	頭	22.6	23.8	24.9	105%	110%
子牛販売頭数	頭	18.2	19.2	19.4	101%	107%
成雌牛1頭当たり販売頭数	頭	0.81	0.81	0.78	97%	97%
子牛1頭当たり販売価格	千円	662	769	673	88%	102%
家畜市場平均価格	千円	653	732	654	89%	100%
成雌牛1頭当たり	子牛販売価格	千円	533	622	85%	99%
	雑収入	千円	62	79	89%	113%
	収入金額合計	千円	623	746	89%	104%
	購入飼料費	千円	206	216	118%	124%
	経費全体に占める割合	%	41	41	46	114%
	農薬衛生費	千円	20	27	92%	125%
	諸材料費	千円	17	21	122%	154%
	動力光熱費	千円	19	22	113%	129%
	荷造運賃手数料	千円	28	31	92%	102%
	経費合計	千円	503	530	103%	109%
同	農業所得	千円	120	215	101%	85%
	販売子牛1頭当たり生産原価	千円	492	525	110%	117%
	総原価	千円	624	656	107%	112%
所得率	%	19.2	28.9	15.6	54%	81%

図3は飼料作付け延べ面積と所得の関係を示しています。所得の大小を左右する要因は様々あり、この図でも同面積が4a未満の4戸が所得1位・2位と9位・10位という両極端な結果となっていますが、所得最小と同面積最大経営のプロットを直線で繋いでみると、後述する理由により所得1位・2位を除いた8経営であれば、作付け延べ面積が大きい方が所得も大きい傾向にあると考えられます。ただ、自給飼料生産の拡大は、土地、労働力、機械等の制約があるため、簡単ではないことは承知していますが、特に、

飼料高騰下の現状においては、所得向上（経費に占める割合が高い購入飼料費の低減）につながる本面積の確保をどうしても検討する必要があるのではないのでしょうか。

なお、同面積が少ない（又はない）ながら、所得1位と2位を実現した経営を詳しく見ますと、前者は、採草は行っていないものの放牧草地を有しており、分娩間隔が1位、子牛1頭当たりの販売価格が2位と優秀な成績で、後者は、規模拡大中により多額の雑収入（補助金及び奨励金）があったことが要因となっています。

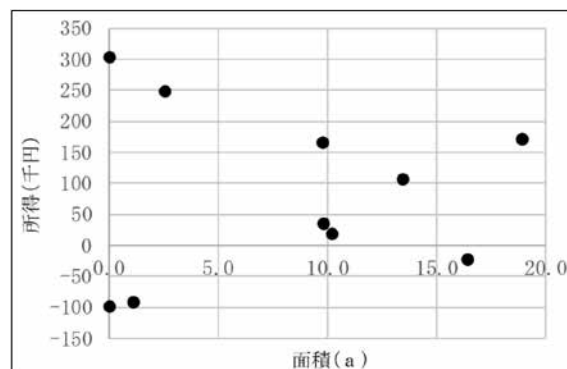


図3 飼料作付け延べ面積と所得の関係

図4は、飼料関連費（購入飼料費に種苗費、肥料費、作業委託料を加算したもの）と所得の関係を示しています。青色申告決算書から抽出のため、飼料関連費に減価償却費や消耗諸材料費等は考慮出来ていませんが、自給飼料費の3項目を加算したことにより、購入飼料費だけよりも最大値と最小値の差は、29千円小さくなっています。

所得9位・10位の経営については、飼料関連費（実質は飼料の作付けがない又はわずかなためほぼ購入飼料費）が400千円を超えており、所得を確保するには厳しいレベルと言えます。

一方、1位から8位の経営については、飼料関連費が200千円弱から350千円未満の範囲にあるものの、その他の要因が影響して所得差が出ていることが分かります。その要因としてポイントになる

のが分娩間隔と子牛1頭当たりの販売価格で、図5と図6に両項目と所得の関係を示しています。

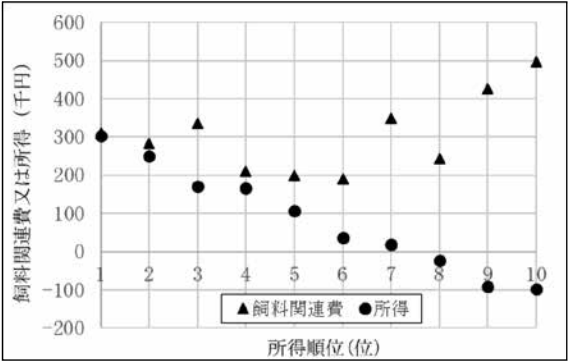


図4 飼料関連費と所得の関係

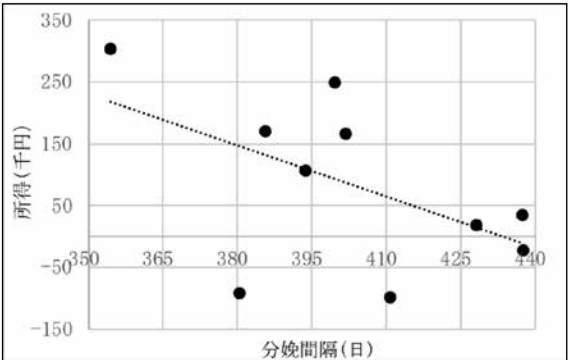


図5 分娩間隔と所得の関係

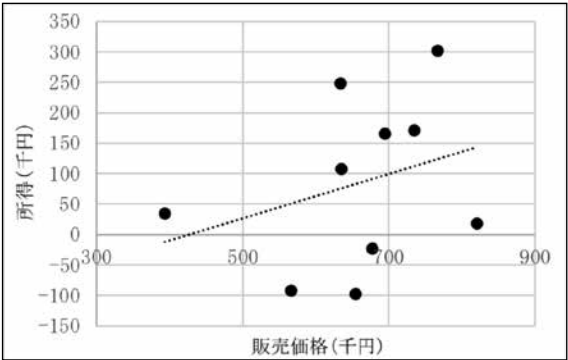


図6 子牛1頭当たり販売価格と所得の関係

図5からは、分娩間隔の良し悪しが所得に直結することが見て取れ、図6からは、同販売価格が高い方が所得は大きくなる傾向にあると言えます。ただ、同販売価格が1位の経営は、分娩間隔と成雌牛1頭当たり飼料関連費がともに8位で所得が19千円に留まっています。また、所得9位の経営については、分娩間隔は2位ながら、子牛1頭当たりの販売価格が9位で、所得10位の経営については、成雌牛1頭当たりの出荷頭数が1位で、同販売価格が6位ながら成雌牛1頭当

りの子牛販売価格も1位であるが、ともに飼料関連費をカバーするには至れていない状況です。

(3) 収益予測

直近3ヵ年の実績と令和5年の子牛市場価格を踏まえ、令和5年における経営収支の試算結果を表9に示しました。なお、共通する項目は、酪農経営編と同様の考え方を用いており、備考欄にその内容を記載しています。

試算①は、年間の市場平均価格が令和5年1～9月期相当の568千円とした場合ですが、子牛1頭当たりの販売価格が令和4年比87.0%まで落ち込むこととなり、成雌牛1頭当たりの収入金額合計は、576千円が見込まれます。

一方、成雌牛1頭当たりの経費合計は、令和4年比105.0%の575千円が見込まれ、同所得がわずか1千円(1,212円)となる厳しい結果が予想されます。

また、試算②は、本対象経営とは異なり、子牛1頭当たりの販売価格が市場平均価格であった場合ですが、成雌牛1頭当たりの所得が-11千円と予想され、経営の継続が困難な状況です。10月期の市場価格はさらに下落しており、先行きが見通せない事態となっています。

表9 令和5年収支試算表

項目		単位	R4	R5 試算①	R5 試算②	備考
全農総合家畜市場平均価格		千円	654	568	568	1～9月期平均
子牛1頭当たり販売価格(A)		千円	673	585	568	①R4対市場価格比 ②市場平均価格
成雌牛1頭当たり子牛販売頭数(B)		頭	0.781	0.798	0.798	3ヵ月平均
成雌牛1頭当たり	子牛販売価格	千円	525	467	454	A×B
	雑収入	千円	89	79	79	令和3年値
	収入金額合計	千円	649	576	563	上記項目以外 3ヵ年平均
	購入飼料費	千円	254	270	270	対R4比106.4%
	農薬衛生費	千円	25	25	25	令和4年値
	諸材料費	千円	26	26	26	〃
	動力光熱費	千円	25	25	24	〃
	荷造運賃手数料	千円	29	25	24	価格連動
	経費合計	千円	548	575	574	上記項目以外 3ヵ年平均
農業所得		千円	101	1	-11	(R4:127千円)
販売子牛1頭当たり生産原価		千円	576	579	578	
同 総原価		千円	701	720	720	
所得率		%	15.6	0.2	-2.0	(R4:8.4%)

3. 肉用牛繁殖経営を維持するために

以上、限られたデータでの分析結果ですが、県内肉用牛繁殖経営の収益性が極めて厳しい状況にあることは間違いないと言えます。このままでは、金銭面の困窮はもちろん、経営を継続する意欲が減退し、離農する経営者が増加することとなり、生産基盤の弱体化は想像に難くありません。

このような背景のもと、国において、従前の肉用子牛生産者補給金制度に加え、令和5年1月から和子牛生産者臨時支援事業が措置されましたが、残念ながら本県の実情とは乖離があり、名称どおりの効果を得られていない状況です。すでに、仕組みの見直しについては、国への働きかけを県に要請したところですが（詳細は、本号「トピック」を参照してください）、この事業に限らず、国等の支援は必要不可欠であり、有益かつ効果的な施策が待たれます。

一方、各経営で、各地域で、県全体で、少しでもやれることはないかと考える必要があります。経営分析の結果から、経営を左右する指標をいくつか上述しましたが、全ての項目で上位となっている経営はなく、良い意味で改善点が残されているのも事実です。今一度、経営内や地域の環境を見渡し、必要な取り組みや対策を見極め、1つ1つクリアーして行くことが大切だと考えます。

まず、経費においては、やはり購入飼料費の増加をいかに抑えるかが重要になります。肉用牛繁殖経営の基本は、国産粗飼料の有効活用です。ただ、(2)で触れたように、経営個々での増産や新規で自給飼料生産に取り組むことは、並大抵のことではないため、組合、地域、県域で飼料自給率を高めることを考えなければなりません。特に、高齢者が多く飼養規模も小さい肉用牛繁殖経営でも利用可能な体系の構築は、重要なポイントと

なるでしょう。

収入においては、「子牛1頭当たり販売価格×繁殖雌牛1頭当たり販売頭数」の最大化が重要になりますが、この有効な対策は、まさに本県が取り組んでいる岡山和牛子牛資質向上対策協議会の活動にほかならないと言えます。

引き続き、地域部会を核とした巡回指導等を行い、哺育育成技術の向上と適正な飼育管理により「おかやま四ツ☆子牛」の作出を目指して欲しいと考えます。そのうえで、育種価やゲノミック評価を活用した優良雌牛群の整備や飼育環境の改善を図ることがさらなる資質向上につながることは言うまでもありません。受精卵移植や性判別精液の活用も販売価格の向上に有効な手段です。

加えて、同協議会では、今年度から繁殖管理指導を重点項目に掲げています。本県の分娩間隔は、全国平均に反してやや延長傾向にあります。一朝一夕にはいかなない課題ですが、病気や事故の低減も含め、繁殖雌牛の増頭だけでなく生産性の向上で販売頭数の増加を図ることは非常に重要であり、同協議会の支援指導にも期待がかかります。

この資質と生産性の向上に努めることが外的環境の厳しい中でも収益の確保へと繋がる方法であり、ひいては、市場の活性化や評価にも繋がり、県外の購入者を呼び込むことも期待できるのではないのでしょうか。

近年の飼料価格の高騰に続き子牛価格の急落によって、肉用牛繁殖経営は、未曾有の危機に直面しています。今こそ経営者と関係組織が一体となって、あらゆる手立てを模索し実行し続けながら、この難しい局面を打開して行くしかないので、乗り越えた先にある畜産業界の繁栄を信じてはいられません。

〔トピック〕

和子牛生産者臨時経営支援事業の ブロック割見直しを！！

一般社団法人岡山県畜産協会

畜産協会と関係農業7団体は、去る10月6日（金）、岡山県知事に対し、和子牛生産者臨時経営支援事業のブロック割の見直しを強く国に働きかけるよう要請書を提出しました（以下の写真）。



和牛については、飼料価格の高騰、高止まりに加え、資材費や動力光熱費等の上昇により和子牛生産費が増加し、一方では、子牛平均価格が令和4年末から大きく下落するなど、極めて厳しい状況となっています。国は従前の肉用子牛生産者補給金制度に加え、令和5年1月から和子牛生産者臨時経営支援事業を措置し、四半期ごとにブロック割平均価格が交付金発動基準となる60万円を下回った場合に、その差額の3/4を補てんすることとしました。

しかし、本県が加入する本州関東以西・

四国ブロックは、全国有数のブランド牛を有する県が含まれるため、8月期に初めて60万円を下回る58万円台が想定されるものの、本県の子牛平均価格（7月期53万円、9月期49万円、10月期45万円）と比較すると大きく乖離しており、補てん金が出にくい状況となっています（図1）。このため、生産者から、ブロック割の見直しを求める声が急激に高まっていました。

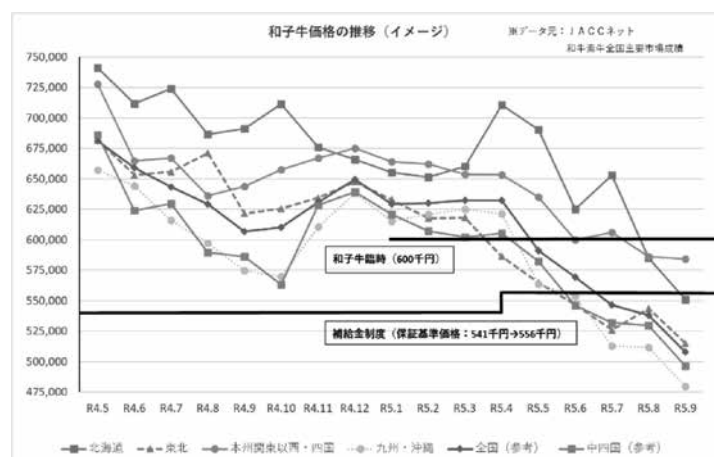


図1

【要請農業団体】

岡山県農業協同組合中央会
岡山県農政協議会
岡山市農業協同組合
晴れの国岡山農業協同組合
おかやま酪農業協同組合
全国農業協同組合連合会岡山県本部
全国和牛登録協会岡山県支部
一般社団法人岡山県畜産協会

サシバエ防除で牛のストレス低減！！

農林水産総合センター畜産研究所

サシバエによる被害は、牛の安寧（あんない）阻害、乳肉生産性の低下、病原体の伝播など大きな問題となっています。現在、農場では様々な方法でサシバエ防除が行われていますが、当研究所では在来天敵を用いた生物的防除法の研究に取り組んでいるので、その概要を紹介します。

1 牛飼養農家のサシバエ被害の実態

多くの牛飼養農家で問題となる衛生害虫にはサシバエ、アブ、ブユ、イエバエ等が挙げられます。これらは様々な疾病を媒介して衛生的な被害をもたらすばかりでなく、牛に多大なストレスを与え、生産性にも影響を与えています。この中でもサシバエは、生活環が短く産卵数も多いため牛舎の中で大量発生すること、また、発生時期が春から秋にかけてと長期にわたり、行動範囲も広く、殺虫剤が効きにくいという点から防除対策の困難な衛生害虫のひとつです。

サシバエ（写真1）は雌雄とも吸血性があり、針のような長い口吻（こうふん）で皮膚を刺し、数分かけて自分の体重と同程度の量を吸血します。サシバエの吸血時には強い痛みを伴うため、牛は睡眠障害や採食減少から、増体減少、乳量低下、乳房炎等を引き起こす事が知られています。また、牛伝染性リンパ腫（旧名称・牛白血病）等の血液を介した伝染病の伝播にも関与しています。

このような状況の中、全国的に様々な方法でサシバエ防除が取り組まれています。その効率的な防除は、作業面や費用面で大きな負担となります。

以上のことから、作業や費用の負担が軽

減できれば畜舎の規模にかかわらず全国的にサシバエの防除対策が普及できると考えられます。



写真1 サシバエ（○部分が口吻）

2 主なサシバエ対策

一般的なサシバエ防除法として大きく次の3つが報告されています。当研究所でも防虫ネットを張るなどして防除を行っていますが、屋外等の広範囲にわたる施設では十分な対策を講じることができていません。

（1）耕種的防除法

ハエ類が産卵し、幼虫が孵化する場所である発生源をなくすることが最も適切な防除であり、畜産の場合、その発生源は糞になるため、定期的に除糞することが最も有効な手段となります。しかし、サシバエをゼロにすることは難しく、こまめに除糞することは時間や労力を要します。

（2）物理的防除法

ハエ取り紙、粘着トラップシート、電撃殺虫器、防虫ネットなどの設置による物理的にサシバエを家畜に近づけさせない方法です。物理的防除法の多くは、1つだけでは十分な効果が得られず、防虫ネットのように手間がかかり、広範囲に行うには経済的負担が大きいなどの課題があります。

(3) 化学的防除法

化学的防除法はいわゆる殺虫剤を使用する方法です。殺虫剤は種類によりますが、単価が高いものもあり、使用量が増えれば、当然コストは増え、生産者にとって農業経営のデメリットとなります。また、毒性があるものや環境汚染、抵抗性病害虫を発生させてしまう危険性も指摘されています。

3 生物的防除法の可能性

害虫防除法は上記で述べた3つが基本となりますが、人畜への安全性が高く、コストや労力などの負担が軽減でき、また、抵抗性病害虫の発生が抑えられる新しい「生物的防除法」に着目した研究が九州大学を中心に行われています。

一般的な生物的防除法は農業、園芸において、天敵を活用し、病害虫の密度を下げる防除法のことを言いますが、サシバエについては天敵となる寄生蜂が2019年に国内で初めて発見されました。発見された寄生蜂は、コガネコバチ科の「*Spalangia cameroni*(スパランギア・キャメローニ)」、和名をキャメロンコガネコバチと言います(写真2)。このハチは、家畜の糞尿や堆肥中に潜り込み、サシバエのさなぎを見つけて産卵し、それを栄養源に成虫となることでサシバエの発生を抑えます。世界中に広く生息し、アメリカやEUではサシバエ対策として製品化もされています。



写真2 キャメロンコガネコバチ(左)とサシバエのさなぎ(右)

4 当研究所の取り組み

当研究所は、令和4年から6年にかけて九州大学が主体となり、国内7道県（北海道、栃木、岡山、福岡、大分、鹿児島、沖縄）が参画している「サシバエの被害調査と生物的防除法開発事業」に取り組んでいます。この研究では、効果的な防除に向けたサシバエの発生状況をモニタリングするとともに、キャメロンコガネコバチ等によるサシバエのさなぎへの寄生状況の調査を行っています。

(1) 発生状況調査

発生状況調査は、粘着シート(写真3)を繁殖牛舎及びパドック牛舎に各10ヶ所設置し、1週間後に捕獲したサシバエ数を計測しています(月2回)。途中経過ではありますが、サシバエの発生は9月頃にピークを迎え、11月頃には見られなくなりました。

(2) 寄生状況調査

寄生状況調査は、堆肥から回収したさなぎを九州大学で羽化・個体判別し、寄生率を調べています。キャメロンコガネコバチ以外にも、在来寄生蜂のハエヤドリコガネコバチ等が確認されています。



写真3
サシバエ発生状況
調査用の粘着シート

5 今後の取り組み

これまでの調査から、サシバエや在来寄生蜂の発生傾向を把握することができました。令和6年度には、当研究所内にキャメロンコガネコバチを放飼し、サシバエ密度をどの程度抑えられるか、防除効果を検証することとしています。

〔家保のページ〕

管内育成牧場のフォローアップ

高粱家畜保健衛生所

1 はじめに

高粱家畜保健衛生所管内にある高粱市大池山育成牧場は、高粱市内に限らず県内の複数の酪農場から、牛が預託される公共育成牧場として酪農経営上、非常に重要な存在であり、疾病対策や適切な飼養管理が重要です。

今回、本牧場の衛生管理についてフォローアップした事例を報告します。

高粱市大池山育成牧場は、大池山育成牧場利用組合が主体となり、管理は常勤職員2名で、受託飼養頭数約120頭、放牧地47haと採草地18haの広大な草地管理を行っています。

2 公共育成牧場の指導体制

この公共育成牧場を取りまく関係機関の指導体制は、市役所が牧場運営の補助、県民局が補助事業の窓口、酪農業協同組合が経営の助言、家畜診療所が診療やワクチン接種、家畜保健衛生所が衛生指導や検査全般を担っています（図1）。

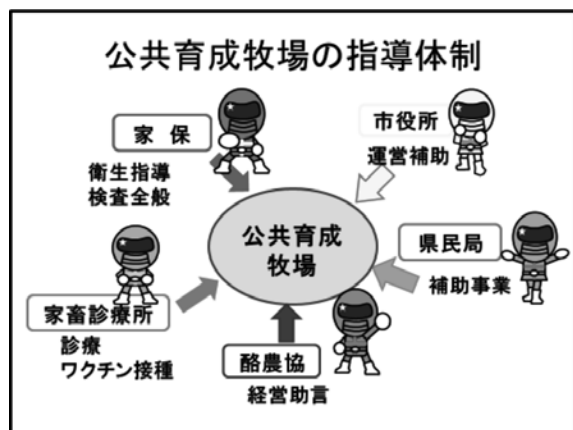


図1 公共育成牧場指導体制

3 家畜保健衛生所の衛生指導

家畜保健衛生所は、当牧場の「衛生管

理プログラム」に基づき、放牧病であるピロプラズマ症の検査やワクチネーション指導、牛伝染性リンパ腫（BLV）対策などの衛生指導を実施しています。

4 育成牧場の課題

当牧場の一番の課題は、BLVの水平感染問題です。1頭1針などの人為的感染拡大予防や吸血昆虫対策を実施しているにもかかわらず、哺育舎から育成舎への移動時に、BLV陽転牛が確認されています。問題の背景には、預託時のBLV遺伝子検査ですでにBLV陽性牛がいることと、本牧場にBLV陽性牛の隔離飼育スペースがないことがあります（図2）。

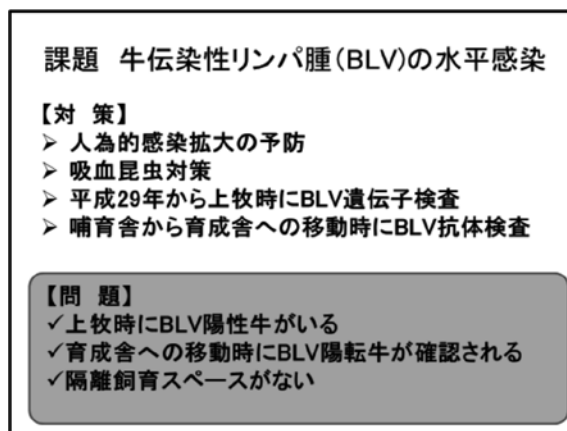


図2 課題 BLV水平感染問題

5 課題解決のための指導

課題解決にむけて長年対策を実施してきたものの、なかなか解決に結びつかない状況の中、どのように思いを伝え、指導すれば良いのか悩みました。しかし、いろいろと悩んだ結果、課題解決に向けて、家保が良いと思ったことを地道に、「こつこつ」と指導していくことが1番だと思い、まずは、飼育環境の改善指導である「哺乳舎・

哺育舎の防虫ネットの修繕」と「畜舎消毒の実施指導」を中心に指導を進めていきました。

6 改善指導の成果

飼育環境の改善については、家保と牧場が十分な協議をおこなった上で、老朽化が激しく、破損が多い哺乳舎や哺育舎の補修を協力して実施しました（図3）。

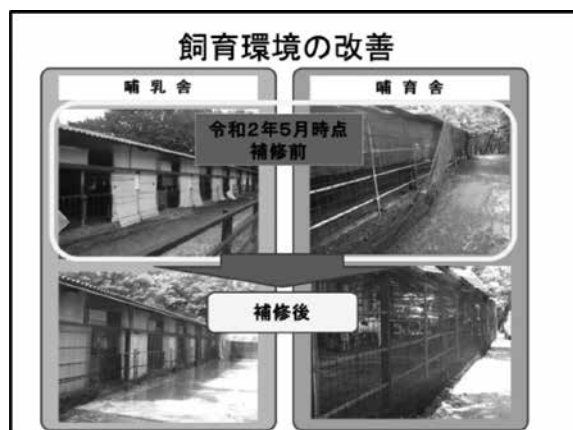


図3 飼育環境の改善

また、BLV対策として吸血昆虫防除などを目的とした殺虫剤散布の適切な散布方法を牧場側に指導し、一時休止されていた畜舎消毒を再開しました。

令和2年度から対策を実施し、令和4年度には、哺乳舎・哺育舎内でのBLV水平感染「ゼロ」を、哺育舎から育成舎への移動時に行うBLV抗体検査で確認することができました（図4）。

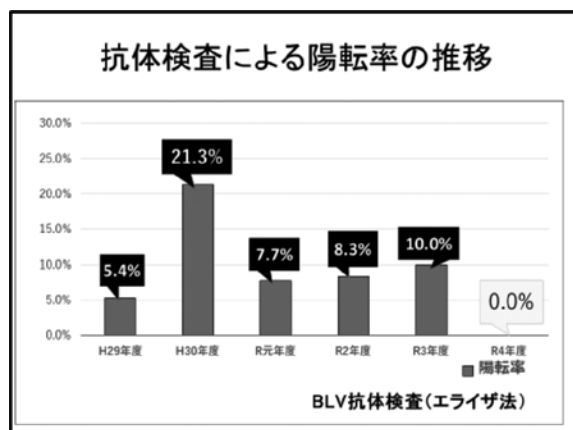


図4 BLV抗体検査による陽転率の推移

この結果から、哺乳舎・哺育舎でBLV陽性牛と陰性牛の隔離飼育ができない状況においても、防虫ネットや吸血昆虫防除などの殺虫剤散布を適切に実施することで、水平感染を防止できたと考えられました（図5）。

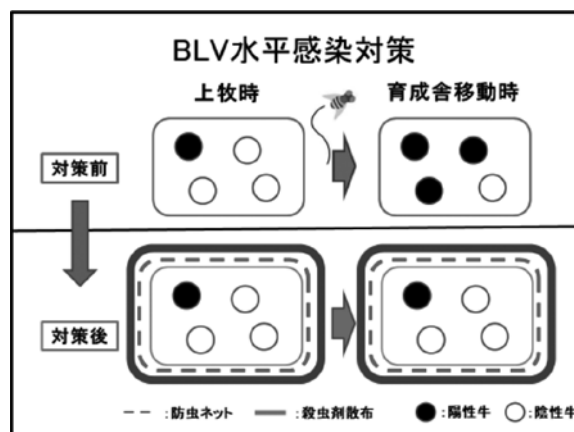


図5 BLV水平感染対策

7 まとめ

牧場施設の補修などを協同で実施したことや粘り強い指導により、牧場職員の衛生対策に対するモチベーションがあがり、衛生対策の見直しを実施する良いチャンスとなりました。

衛生管理指導は、口頭だけの指導では難しく、目的は何かということを相手側に伝え、関係機関が協力して、粘り強く指導することが重要です。

この状態が維持できるように、今後も関係機関とともに、フォローアップしていきたいと考えています。



〔家畜衛生〕

補助事業を活用して、牛伝染性リンパ腫の対策を！

一般社団法人岡山県畜産協会 家畜衛生部

○牛伝染性リンパ腫って？

牛伝染性リンパ腫は、牛伝染性リンパ腫ウイルス（B L V）感染により、血液中の白血球が異常増殖し、リンパ節が腫大する病気です。このウイルスに感染した牛は、血液や乳汁等を介して、他の牛への感染源になります。

感染牛の多くは無症状ですが、数%は数年の潜伏期間後に発症し、生産性が著しく低下、数週間から数か月で死亡します。また、出荷後にと畜場で診断された場合は、全部廃棄になるため、大きな経済的損失となります。

なお、有効な治療法やワクチンはありません。

県内での発生は、令和4年は13戸、63頭で（図1）、1戸あたりの発生頭数が平均約4.8頭となっており、効果的な対策をとっていないと考えられる農場に被害が集中していると思われます。

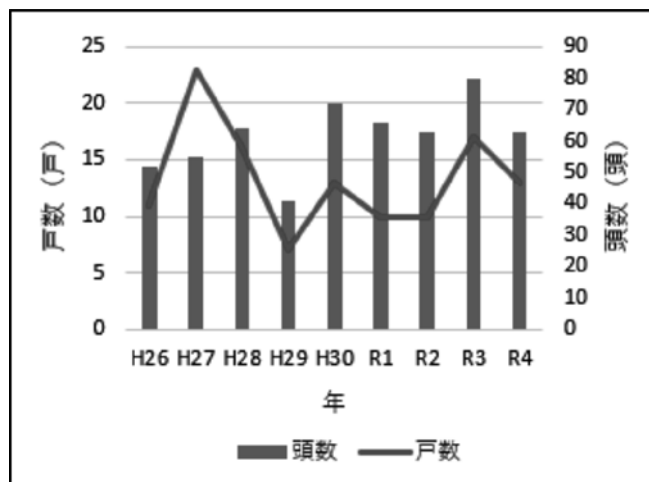


図1 県内の牛伝染性リンパ腫発生状況
農林水産省HP 監視伝染病発年報より

○どのようにして感染するの？

以下のとおり、牛群内で感染するルートと母牛から子牛へ感染するルートがあります。

【牛群内で牛から牛へ】

- ・吸血昆虫（アブやサシバエ）
- ・感染牛の血液が付着した物（注射針、直検手袋、器具）
- ・感染牛の分娩後に分娩房をそのまま利用

【母牛から子牛へ】

- ・B L V感染牛の乳
- ・産道

○どのように対策したらいいの？

対策については、農林水産省から牛伝染性リンパ腫（牛白血病）に関する衛生対策ガイドライン（以下、ガイドライン）が示されており、牛の飼養者、獣医師、家畜人工授精師、関係機関等が一体となって取り組むこととされています。

牛伝染性リンパ腫のまん延防止対策は、まずは検査でB L Vの感染状況を把握することから始まります。そして、農場内での感染拡大を防ぐとともに、血中ウイルス遺伝子量を考慮したうえで、経営状態に配慮しつつ更新の優先度をつけて、感染牛をとう汰することも有効です。

○家畜生産農場衛生対策事業（表1）を活用し、対策に取り組みましょう！

岡山県畜産協会では、「家畜生産農場衛生対策事業」により、ガイドラインに基づいて

飼養者が実施する牛伝染性リンパ腫対策の経費を補助しています。

事業には、3つのメニューがあります。1点目は、検査費用や陰性証明書の交付料に対する補助、2点目は共同放牧場に対する検査費用や吸血昆虫の忌避駆除費用の補助、3点目はウイルスを伝播させる可能性が高い牛（以下、高リスク牛とする）のとう汰補助です。

繰り返しになりますが、対策は、まず農場内の感染状況の把握から始まります。岡山県の家畜保健衛生所では、牛伝染性リンパ腫の抗体検査を1件840円、BLV遺伝子を検出する抗原検査を1件2,650円を実施しています。畜産協会では、その1/2以内を補助しています。なお、検査の補助は、過去に抗体陽性となった牛の抗体検査は対象外ですので、家畜保健衛生所の指導を受けながら取り組んでください。

表1 家畜生産農場衛生対策事業概要

メニュー 要件	・検査費 ・証明書の交付料	・共同放牧場等に係る検査費 ・吸血昆虫の忌避駆除費	・高リスク牛のとう汰費
対象となる農場	・ガイドラインに基づく対策に取り組んでいく農場	・共同放牧場 ・ガイドラインに基づく対策に取り組んでいく農場	・6か月齢以上の全頭検査を3年以上行い、感染牛を分離飼育している農場 下記※1①～⑤のうち、3つ以上実践していること
助成する牛又は内容	・過去の検査時に抗体陰性であった牛 ・未検査牛 ・発症牛への抗体検査及び抗原検査並びに陰性証明書の交付	・共同放牧場への入場前に抗体陰性だった牛及び未検査牛に実施する抗体検査及び抗原検査 ・感染牛がいる農場における防虫ネット等の資材費(※2) ・感染牛に対するアブ・サシバエの忌避・駆除剤費	・乳用又は肉用の繁殖牛 ◎血液ウイルス遺伝子量等を考慮したうえで、高リスク牛を優先して淘汰すること(※3)
補助率	1/2以内	1/2以内 忌避駆除費は、1施設当たり88千円が上限	評価額の2/3から利用額を控除した額以内(※4)
R4実績	抗体検査延べ1,307頭 抗原検査延べ253頭	抗原検査 延べ80頭	0頭

※1 ①人為的な伝播を防止するための対策 ②吸血昆虫対策 ③初乳の加温、凍結又は初乳製剤の使用 ④早期母子分離飼育 ⑤導入牛の隔離・検査

※2 防虫ネットの網目は、アブ対策では1cm以下、サシバエ対策では2mm以下。

※3 牛のウイルス遺伝子量が少ない低リスクの牛が他の理由によって先に廃用になっても、その時点でリスクが高い牛の順に淘汰が補助の対象となります。

※4 評価額の上限は、95万円



図2 防虫ネットの設置例
中国四国酪農学校

〔共済フレッシュさん〕

獣医師として二年目を迎えて

美作家畜診療所 伊藤 友

はじめまして。農業共済組合 美作家畜診療所の伊藤友です。

昨年度入職し、二年目になります。一人で診療に出始めてちょうど一年が経ちました。車の運転に慣れるところから始まり、道を覚え、牛舎に辿り着くのがやっとだったところから少しずつ慣れてきました。まだまだわからないこともたくさんあり、技術も未熟ではありますが、先輩や農家の皆さんに助けをもらいながら、日々診療に励んでいます。

そんな私について、この場をお借りして自己紹介させていただきます。出身は三重県桑名市で、畜産とは全く縁のない生活をしていました。小さいころから動物が大好きで、人見知りをするのに、大きな動物には物怖じせず自分から触りに行くような子どもだったそうです。

小学校一年生から父親の影響でテニスを習い始め、試合でもっと勝てるようになりたくて、中学では部活と二つのスクールを掛け持ちしていた時期もありました。体力面はもちろん、精神面もこの時期にかなり鍛えられたと思います。

高校に入り将来を考えたときに、小さい頃から漠然と動物に関わる仕事がしたいと思っていたこと、また獣医師という職業に憧れがあったことから獣医師を目指すことにしました。しかし私は理系科目がとても苦手な、定期テストでは何度か再試験に引っかかりながらも、なんとか獣医大学に合格しました。

大学は神奈川県の日本文学部に進学しました。慣れない関東ではじめての一人暮らしでしたが、人に恵まれ、大学生活は本当に楽しく過ごせました。実家で猫を飼っていたこともあり、はじめは犬や猫を診る獣医師を目指していたのですが、実習で牛に触れたり、牛を扱う研究室に入ったりして(写真は研究室活動で直検しているところ)、だんだんと牛の可

愛さや牛を診る面白さに惹かれて、この道に進むことを決めました。

岡山県は、入職する前共済に実習に来たきりで観光にも来たことがありませんでした。冒頭にも書きましたが、入職直後は仕事に慣れるのと、車の運転に慣れるのに必死で(ペーパードライバーでした)、休日は何もできませんでした。しかし今では岡山市や倉敷市まで出て有名どころを観光したり、美味しいものを食べに行ったり、楽しく休日を過ごしています。

最近は県外へ旅行に出かけることも楽しみの一つで、今年に入ってから、山口、香川、愛知、岐阜、東京など色々なところに行きました。旅行はあまり予定を立て込まずのんびりまわるのが好きで、その土地の美味しいものを食べるのが一番の楽しみです。

直近では夏に北海道の羅臼で船に乗って、野生のシャチの家族を見られたことが嬉しかったです。北海道で食べた海鮮も最高でした。

拙い文章でしたが、ここまで私の自己紹介をお読みくださりありがとうございました。農家の皆さんに信頼して頂ける獣医師になれるよう、誠実な姿勢を大切にコツコツ積みあげていきたいと思っています。またお会いすることがあればよろしくお願いします。



〔畜産現場の声〕

酪農家は共働き家庭の理想の形

吉備中央町 雲岡 阿耶

私は牛に全く関係のない家庭で生まれ、進学を機に岡山県にやってきましたが、大学でも違う専攻を学んでいました。人生に『牛』という選択肢がないまま育ってきました。

大学4年で就職活動で暗中模索していたところ、ある人が「うちで牛をやろうよ」と声をかけてきてくれました。その人というのが今の主人です。その一言が私の人生を決めることになるのです。

右も左もわからないまま酪農界に飛び込みましたが、知らない土地で、想像と全く違う命と24時間向き合う現場と自分の不甲斐なさには最初は一人で泣いてばかりいました。「子牛のミルクだけやってくれればいいよ」と言われていたのに、搾乳を始め牛の管理全般など、やることが山積みになっていきました。その都度主人の両親が一から丁寧に教えてくれて、獣医さんや業者さんにも相談しながら理解を深め、できることが少しずつ増えていき、気が付いたら、寂しくて一人で泣くことはなくなっていったのです。仕事内容だけではなく、牛との向き合い方や牧場としての考え方を教えてくれて、私に仕事を任せてくれた主人の両親には本当に感謝しています。

あっという間に駆け抜けた12年間の間に、4人の子供たちに恵まれ、牛の仕事をしながら子育てにいっぱいいっぱいな毎日です。その12年間で感じたことは、酪農家は共働き家庭の理想の形だな、ということです。牛舎で仕事をしながら子供を見て、子供たちは作業をする大人の姿を見る。その姿を見ながら、子供たちも作業を手伝うようになり、気が付いたら私よりも牛の性格を理解して仲良くなっている息子の姿が

ありました。自分達で下の子の面倒をみてくれて、私が仕事に集中できるのは子供たちのおかげだといっても過言ではありません。昔はこれが当たり前だったのだろうなと思いますが、世代を超えて家族全員が支え合いながら生活していくことはもしかしたらとてもありがたいことなのではないかと思うのです。

その一方で、人手不足であることも悩みの種です。仕事を探している、牛の仕事に興味がある、という相談をよく受けます。が、作業時間の話になると無理だな…と言われてしまいます。特に子育て世代にとっては一番忙しい時間が牛の作業時間に重なってしまうため、かなり厳しいそうです。私自身もそれは感じます。子供がいる平日の朝晩は1分1秒の戦いです。それに、家族でいきなり旅行に行こう！なんてことは当然できません。前もってヘルパーを取り、段取りを全部していかなければならない不便さも、動物を扱う現場から離れてしまう要因になっていると思います。

今は戦争やコロナの影響で世界が揺れており、酪農界にも大きな影を落としています。でも、我が家が酪農家であるということを知っている人たちからは、「学校で余っていた牛乳をみんなで協力して全部飲むようにしている」とか、「うちでは1日3本買うよ！」「いつも牛乳ありがとう！」など嬉しい言葉を他にもたくさんいただきます。それだけでもっと頑張ろう！とやる気になります。サラリーマン家庭で育った私だから気づく点もあるはずですが、酪農界が少しでも明るくあるように、今が踏ん張り時だと思うのです。

〔担い手〕

中国四国酪農大学校における 酪農担い手育成の取り組み

公益財団法人中国四国酪農大学校 教務課長 関 哲生

コロナ禍が落ち着き、4年ぶりに学生募集を目的に関東から九州の各都道府県の養牛施設を保有する農業高校を訪問しました。各高校では全国共進会や和牛甲子園での上位入賞を目指しての活動や学校ブランドの畜産物製品の加工販売など、それぞれ有意義な取組を紹介していただきました。一方で、昨今の飼料・資機材・高熱水費の高止まりや専門教員不足等により実習施設を維持していくことが極めて難しくなっているという声を多く聞きました。加えて、卒業する生徒のうち畜産関係の分野に進学・就職する割合が減少し、畜産学科の存在意義が問われていることなど、コロナ禍以前に比べ畜産担い手育成の状況が厳しくなっているように感じられました。特にコスト面、人材面で維持管理が難しい酪農実習施設は統合・廃止、または和牛飼養に転換するなどの高校もあり、酪農の担い手育成の現場が縮小しているのではないかと危惧しました。

本校に目を向けても、入学生の姿は少しずつ変わってきています。例年20数名の入学者がありますが、以前は9割以上が農業高校出身者であったものが、最近は農業高校以外からの進学の割合が高まりつつあり、実家が畜産業を営む後継者は2割に満たない状況となっています。入学者に志望動機を聞くと、SDGsや脱炭素、クリーンエネルギーなどグローバルスタンダードへの強い意識や、都市一極集中型人口問題への関心など、よりよい社会創造への意欲、幼い頃の牧場体

験に基づく憧れや働き甲斐（自己の存在意義）など、自己実現の場として畜産を選択したという内容を多く聞くようになりました。本校ではこうした変化に対応し、学生たちの期待に応えられるよう、環境、牛、人にやさしい持続可能な酪農が実践できる農場の充実に努めています。IoT機器の導入等によるスマート農業化や農場HACCPに基づく管理システムの運用、自給飼料生産による循環型酪農を実践し、今後は放牧酪農の導入やメタン発酵処理施設の整備を検討しているところです。

本校の卒業生は、ほぼ全員が酪農・肉用牛関係業種に就職していますが、牧場の従業員や酪農ヘルパーなど、家畜管理業務に従事する雇用就農の割合が高くなっています。自営就農は親や親族の経営を受け継ぐ継承タイプのほか、離農を考えている経営の委譲や離農跡地を利用した新規就農タイプの例がありますが、割合は低くなっています。

雇用就農後の動静について詳細な調査は実施していませんが、就農から数年後に転職したとの情報をよく耳にします。転職の理由として「不安定な就業時間」「休日が取りづらい」「人間関係」など雇用環境に起因する内容が多い一方で、キャリアアップを目的とした転職や授精師・削蹄師など技能職に専念するなど積極的な転向も見受けられます。内閣府が調査した就労等に関する若者の調査結果によると、仕事より家庭・プライベートを優先したい若者が増加し、転職を否定的に捉

える若者は少ない傾向があるとされていますが、本校卒業生においても同様のようです。他業種への転向例も少なくないことから、畜産業界からの人材の流出が惜しまれます。雇用する側の業務体制の明確化や教育プログラムの充実、キャリアアップに応じた報酬などが求められるほか、現代の若者には従来の「親方と弟子」のような労使間の関係性は受け入れられないことを認識することが重要であると思われる。

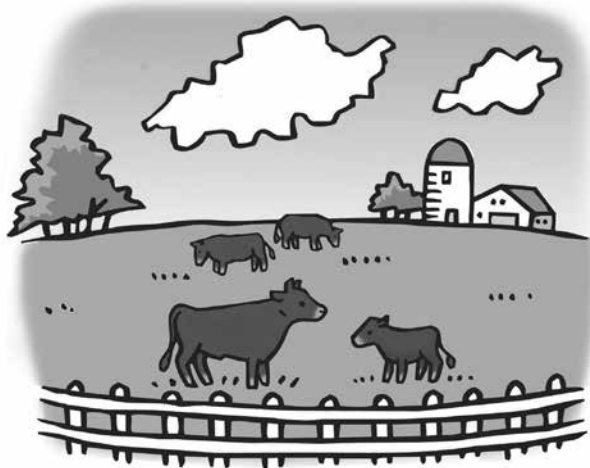
新規就農タイプの自営就農については、自治体や農協の紹介を受け、離農を検討している経営に一旦雇用就農し、徐々に経営を移譲する形で独立するいわゆる「居抜き」の事例が数例あります。新規就農を進めるためには物件と就農希望者のマッチングのみでは不十分であり、独立までの技術習得支援や生活補償などの支援を併せて実施する必要があることから、成功事例はいずれも関係機関の強力な支援の賜と感謝しています。本校でも、こうした新規就農を後押しするために、意欲ある卒業生を職員として雇用しながら技術修得と就農までの経営計画、資金計画、制度活用などを総合的に支援するコースの設定を検討しているところです。

本校では、将来の担い手育成のための学生教育に加えて、酪農に関連する機関に所属する社会人を対象とした酪農フィールド研修科(社会人研修)を設置し、受講者のキャリアアップや酪農に対する理解度アップを図るとともに、酪農現場の支援者を育成することを目的とした研修活動に取り組んでいます。「酪農支援の担い手育成」です。研修期間と研修内容は受講者のニーズにあわせて1週間、2週間、1ヶ月、1回あたり10名程度のコースを設定し、酪農に関する講義と実習を行っています。令和5年度には農協、

乳業会社、飼料会社等から83名の受講がありました。これからも関連業界から支持されるよう取り組んでいきたいと思っています。

さらに本校では、消費者への理解醸成活動を「消費の担い手育成」ととらえ、子ども達を対象とした体験活動に力を入れています。子ども達に理解を深めてもらうことで、将来の理解ある消費者を育てると同時に、「生産の担い手」の発掘にもつながると考えています。こうした理解醸成活動には従来から取り組んでいましたが、本年3月に中央酪農会議から「酪農教育ファーム」の認証を受けました。今後は、ファシリテーターとしての学生の実習機会を設け、活動の充実強化を図っていききたいと考えています。

時代の移り変わりや新しい機器の開発、家畜の改良進度等に伴い、求められる担い手の姿も刻々と変化しています。一朝一夕には完了しない担い手育成の取り組みは多角的、長期的な視野に立って継続して取り組まなければならなりません。厳しい環境下にありますますが、関係の皆さんとの関わりを大切にしながら、将来を見据えた「担い手育成」に取り組んでいきますので、引き続きご支援とご協力をお願いします。



動物用 カルシウム剤 ダービー

ダービーは貝化石の
微粉末であり貝化石には
カルシウムや各種ミネラルが
豊富に含まれています。
カルシウムの供給源として
搾乳牛や子牛にも
最適です。



おいしいよ〜♪



JYUCHIKU Co., Ltd. 株式会社ジュウチク

岡山市北区今保 99 番地 3

Tel.086-259-1230 Fax.086-259-1231

Email : jyuchiku@festa.ocn.ne.jp

健康な仔牛づくりへの
一歩目はこれから！



弊社では、四十年余り培ってきた醗酵技術を用
いることで、乳酸菌やその他の菌類を使用した良
質な醗酵飼料を、肉用・乳用を問わず、全ての
ステージの牛に対して提供しております。

また、弊社ではこれらの技術を利用したオーダー
品の設計や生産、飼料米の粉碎などの原料の
加工も承っております。

原料を持込での加工依頼や、御要望の数量の
多寡を問わず、まずはお気軽に御相談下さい。

醗酵飼料のパイオニア

フタバ飼料株式会社

〒709-0841 岡山県岡山市東区瀬戸町方富1057-1

TEL 086-953-0832 FAX 086-953-1870

E-mail : futabashiryo.co.jp

(公社) 中央畜産会からのお知らせ

畜産映像情報 がんばる! 畜産! 6

畜産現場の“今”を30分の番組にしました!

映像を各種研修会、セミナーにご活用ください!

配信中の内容: 国産原料100%の飼料で黒毛和牛を肥育する農家に密着! / シリーズ 令和の畜産危機にさせないために / 放牧で飼料代燃料代を抑えた酪農経営 / 他



◀スマートフォンからはこちら
▼パソコンからはこちらで検索

がんばる畜産



お問合せ: (公社) 中央畜産会 経営支援部 (情報) TEL03-6206-0846

家畜改良事業団

新規選抜種雄牛

31 親極

当団気高系No.1の脂肪交雑能力!

皮下脂肪厚 圧倒的1位!

当団田尻系第2位の枝肉重量!

全形質で父「福之雄」を凌駕!!

「茂金」系の希少遺伝子を色濃く受け継ぐ注目の1頭!

期待の気高系種雄牛!

E黒041 いとかつゆり 糸勝百合 気高系 美津百合×北平安×藤忠平 ▲詳細はこちら	P黒1134 -ますひらさかえ- 増平栄 田尻系 福増×藤平茂(事業用)×第6栄 ▲詳細はこちら	P黒1150 -ふくますりで- 福増秀 田尻系 福増×秀正実×忠富士 ▲詳細はこちら	P黒1154 -ふくまつたろ- 福勝鶴 田尻系 福之雄×藤忠平×金幸 ▲詳細はこちら	P黒1167 -しびりちゆり- 茂弘百合 茂金系 茂弘松井×茂洋×百合茂 ▲詳細はこちら	P黒1145 -さんし- 銀丞 気高系 秋忠平×藤忠平×平茂勝 ▲詳細はこちら
枝肉重量/53,566 [4位] BMSNo. 3,449 [2位] 歩留基準値 2,544 [2位] 皮下脂肪/-0.491 [11位]	枝肉重量/21,445 [4位] BMSNo. 5,023 [2位] 歩留基準値 2,491 [2位] 皮下脂肪/-1.279 [1位]	枝肉重量/65,149 [8位] BMSNo. 2,491 [2位] 歩留基準値 0,936 [2位] 皮下脂肪/-0.279 [2位]	枝肉重量/102,269 [1位] BMSNo. 3,726 [2位] 歩留基準値 3,298 [1位] 皮下脂肪/-0.458 [4位]	枝肉重量/33,114 [4位] BMSNo. 1,817 [2位] 歩留基準値 1,530 [4位] 皮下脂肪/-0.266 [4位]	枝肉重量/76,867 [4位] BMSNo. 1,782 [2位] 歩留基準値 0,261 [2位] 皮下脂肪/0.488 [2位]

高知競馬開催案内(2023)

地方競馬の収益金の一部は国内の畜産振興に役立てられています。

11月						12月											
開催日			備 考			開催日			備 考			開催日			備 考		
1	水			17	金			1	金			17	日	○	ナイター		
2	木			18	土	○	ナイター	2	土	○	ナイター	18	月				
3	金			19	日	○	ナイター	3	日	○	ナイター	19	火				
4	土	○	ナイター	20	月			4	月			20	水				
5	日	○	ナイター	21	火			5	火			21	木				
6	月			22	水			6	水			22	金				
7	火			23	木			7	木			23	土				
8	水			24	金			8	金			24	日				
9	木			25	土	○	ナイター	9	土	○	ナイター	25	月				
10	金			26	日	○	ナイター	10	日	○	ナイター	26	火				
11	土	○	ナイター	27	月			11	月			27	水				
12	日	○	ナイター	28	火			12	火			28	木	○	ナイター		
13	月			29	水			13	水			29	金	○	ナイター		
14	火			30	木			14	木			30	土				
15	水							15	金			31	日				
16	木			ナイター(14:45～20:50)				16	土	○	ナイター	ナイター(14:45～20:50)					

ホ ッ ト ニ ュ ー ス

肉用牛繁殖経営指導研修を開催しました！

本号の内容でもご紹介したとおり、和子牛価格が下落の一途をたどっています。支援機関が肉用牛生産者の経営に適切なアドバイスが出来るよう、経営研修会を開催しました。三回に分けた研修で第一回目は経営診断の基礎や簿記の見方などを学習しました。この研修が生産者の経営支援に少しでも役立つことを願っています。



あとがき

筆者が畜産業界に飛び込んだ時には、本誌を購入するだけの不良読者だった。それから月日が流れ、一度は訳あって職を辞したのだが、今年度から本誌編集人を任され、あとがきを書いている。人生とは不思議なものである。そして今、社会構造の凄まじい変革の波にのまれ、未曾有の危機に直面している畜産業界の渦中にある。このような輩が苦境に立たされている農家の心中を慮っても、表面的な共感の限界を感じざるをえない。しかしながら、本県畜産を連綿と紡いできた先人たちに想いを馳せる時、それでもなおその隔たりを超える可能性を探し、先人の想いを未来へ繋いでいくこと、それが不良読者だった自身の使命だと思っている。(H.F)。

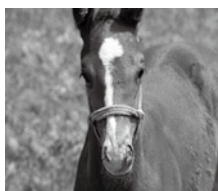
岡山畜産便り 10月号(秋季号)

第74巻 第6号(通巻707号)
令和5年10月26日発行
定価250円(消費税・送料含)

発行人 柴田範彦 編集人 藤原裕士
発行所 一般社団法人 岡山県畜産協会
〒700-0826 岡山市北区磨屋町9-18 岡山県農業会館5階
TEL 086-222-8575 FAX 086-234-6031
印刷所 ノーイン株式会社



メディバルグループ



動物の健康は 人の健康につながる

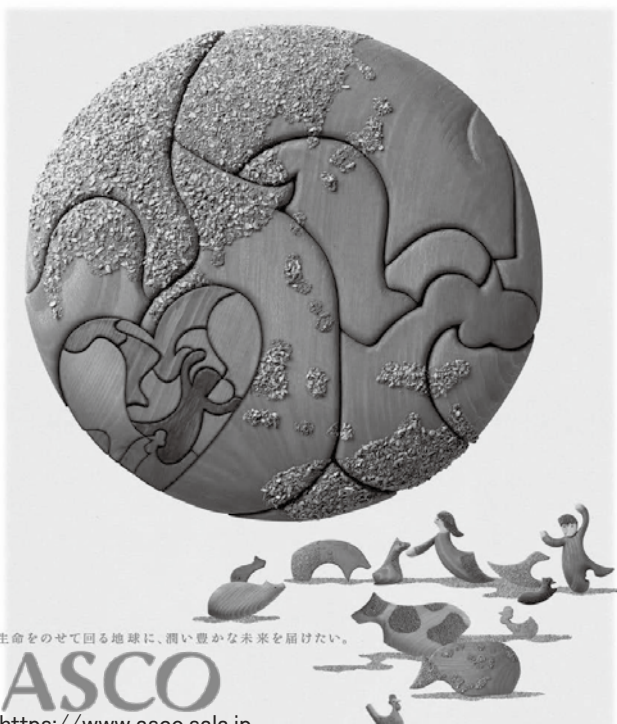
- 動物用医薬品販売の全国ネットワークを駆使し、あらゆる動物の健康維持に貢献します。
- 安全な畜水産物の生産をサポートし、獣医療の発展と食の安全・安心に貢献します。

MPアグロ株式会社

本社 〒061-1274 北海道北広島市大曲工業団地6丁目2番地13
TEL 011(376)3860 FAX 011(376)2600

岡山支店 〒709-2122 岡山市北区御津吉尾1-1 TEL 086-724-4880 FAX 086-724-4889
AHSC西日本 〒702-8032 岡山市南区福富中2丁目6-18 TEL 086-902-2200 FAX 086-264-2500
御津物流センター 〒709-2122 岡山市北区御津吉尾1-1 TEL 086-724-4816 FAX 086-724-4882
東京本部・札幌・旭川・函館・帯広・北見・釧路・青森・秋田・盛岡・山形・仙台・東京・北関東
大阪第一・大阪第二・兵庫・広島・山口・鳥取・島根・高松・徳島・松山・宇和島
福岡オフィス・福岡第一・福岡第二・熊本・宮崎・鹿児島・鹿屋
札幌物流センター・帯広物流センター・盛岡物流センター・関東物流センター

人と動物の健やかな共生環境づくりに貢献します



生命をのせて回る地球に、潤い豊かな未来を届けたい。

ASCO

<https://www.asco.sala.jp>

本社

〒441-8021
愛知県豊橋市白河町100番地
TEL 0532-34-3821 FAX 0532-33-3611

東京本社

〒103-0027
東京都中央区日本橋1丁目16番地3号
日本橋木村ビル7階
TEL 03-6225-5790 FAX 03-6225-5791

営業所

- ・北海道支店
札幌
- ・東日本支店
前橋、松本、旭、茨城、栃木、東京
大宮、宮城、福島
- ・中日本支店
豊橋、安城、浜松、沼津、岐阜、名古屋
- ・西日本支店
広島、山口、米子、岡山、大阪、京都